

〔注意〕字数制限のある問題では、句読点や符号も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

この変化の激しい現代日本社会において、大人が子どもに伝えるべきものとは、何なのだろうか。

端的に言えば、それは、「およそどのような社会に放り出されても生き抜いて行ける力」であろう。とはいえ、現代は原始時代ではないのだから、「生きる力」は単純な生物学的な生命力だけを意味するわけではない。もちろんこの単純な生命力はあらゆる活動の基本となるものであるから、これを活性化させる意義は大きい。それを前提とした上で、現代社会における「生きる力」とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。

私が考えるに、この「生きる力」とは、「上達の普遍的な論理」を経験を通じて「技法」^{わづか}しているということである。どのような社会にも仕事はある。たとえ自分が知らない仕事であっても、仕事の上達の筋道を自分で見出すことができる普遍的な力をもし持っていれば、勇気を持って新しい領域の仕事にチャレンジしていくことができる。

このように言うは一見抽象的なようだが、周りを見渡せばこれを技法^{わづか}している人間がいることに気づくのではないだろうか。私自身は、上達の論理の技法^{わづか}ができている人にこれまで何人も出会ってきた。その中で印象的であったのは、イラン人のピリさんというひとである。

ピリさんとは、私の自宅の近くの駅で出会った。彼の友達を探している家への道を聞かれ、案内した。一緒に歩いていくうちにイキトウゴウ^いして、彼のアパートへ招かれ、カレーをごちそうになった。彼とは日本語と英語を交えて、会話をした。日本に来て三ヶ月程度で、しかもそれ以前に日本語は習ったことがなかったにもかかわらず、コミュニケーションを日本語で十分とることができた。これは私にとっては、驚異的なことであった。ピリさんは英語もまた数ヶ月程度しか学んでいないのに、英語でのコミュニケーションもある程度できた。

彼の言語の学習の仕方は、徹底的に自学自習主義であった。テレビやラジオから言葉を聞き取り、それをノートにとって反復して覚えたり、積極的に日本人と話すことによって実践的に会話を鍛えていた。コウガク^こ心にあふれ、分からない日本語があ

るとどういう意味なのかとすぐに聞いてきた。彼は、当時流行^{はや}っていたブレイクダンスをやって見せてくれた。「どこで習ったのか」と聞いたが、彼は少し驚いたように、「どこでも習っていない。うまい人がやっているのを見て、それを何度もまねて、自分で練習して覚えた」と答えた。

彼は渋谷のレストランで仕事をしていて、その給料でアパートを借りて暮らしていた。彼は仕事では、わりといい給料をもらっていた。どうして仕事がそんなにできるのかと尋ねたが、答えは同じく「よく見て、まねをすればいい」ということだった。

A サラダを作るのなどは簡単で、一回見れば覚えてしまう。それを他の人にはできないほど速くやるようにしたので、店で評判がよくなったと言っていた。

イラン人が皆、このような生き抜く力を持っているわけでは、必ずしもない。来日三ヶ月のピリさんに頼っている同郷の友人も、かなりいたようだ。ピリさんは何をやるに際しても、自分は上達するというカクシン^かを持っているようであった。特定の事柄についてではなく、上達一般に自信を持っていた。うまい人のやることをよく見て「その技をまねて盗む」ということが、上達の大原則にすえられていた。

うまい人のやることをよく見て、その技をまねて盗む。これが、上達の大原則である。こんなことは当然だと思ふ人が多いかもしれない。B、それを強いカクシンを持って自分の実践の中心に置くことができるかどうか。それが勝負の分かれ目なのである。学校教育をはじめ日本の教育の場の多くでは、この「まねる(盗む)力」は、上達の論理の大原則として明確に認知されていない。それどころか、日本の教育においては、上達の普遍的な論理の技法^{わづか}ということ自体が主題として認識されているとは言いがたい。

教育は「学ぶ力」を育てることに本義がある。C、「教える」があっても「学ぶ」がなければ、それは教育とは呼べない。反対に、「教える」がなくとも「学ぶ」が起こっていればそれは立派な教育だと言える。「教える——教えられる」という関係が教育の中心の関係だと皆がとらえてしまえば、「まねる(盗む)力」は当然育ちにくい。

言葉で丁寧に教えてもらえないからこそ、あるいは言葉で教えてもらえる以上のものを身につけたいからこそ、「技を盗もう」という意識が生まれる。技は、何となく見ているだけでは、トウテイ^ど身につけることはできない。「技を盗むんだ」という意識を強く持って、積極的な構えをもって場に臨むことによって、初めてヒントが得ら

れるのである。これは、テレビのエンターテインメントのサービスを受け身的に享受している構えとは、対極にある構えである。

技を盗むためには、漠然と見るのでは不十分である。盗むべきポイントを絞り込んで、見つめる必要がある。そうしたポイントの「絞り込み」を、自分の身体を動かして行うプロセスが、技を盗むためのソジとなる。ポイントとは、ここがわかればパズルが完成するというキーである。そうしたパズルは与えられるものではなく、技を盗む側が自分でつくるものである。

〈技を盗む力〉自体は普遍的なものだが、時代の全体的傾向として親切に教える役割の人間が増えてきたこともあって、衰退する傾向にある。サービスされることに慣れすぎてしまうと、自分から貪欲に技を盗もうとする意識が育ちににくい。

「技を盗む」と聞くと、未熟な者が熟達した者の技を盗むケースばかりイメージしがちである。しかし現実には、熟達している者が、トータルに見れば自分よりも未熟な者から盗む場合もある。というのは、一つ一つの技術を細かく見ていけば、全体的には劣る者でも、その中の一つは集団の中でナンバーワンだというケースは稀ではないからだ。

技を盗む意識は、熟達者ほど高い。その高い意識で自分の技術向上のヒントを後輩から盗むのも、十分可能である。当人が自分の優れた点について自覚していない場合もある。当人が気づいていないで行っているコツや工夫を、熟達者は意識化された目でとらえる。

技を盗む力の根本は、暗黙のうちに⁶行われている事柄を認識し、表面化させるといふ作業である。そして、その表面に浮上させた認識を、もう一度自分の身体に沈み込ませて技としていく。そうしたプロセスができあがってはじめて、技を盗むということが可能になる。

(齋藤 孝「できる人」はどこがちがうのか」より)

* 普遍的……すべてのものにあてはまるさま。

問一 —— 線部 a のカタカナを漢字に改めなさい。

- 3 -

問二

A

C

 にあてはまる最も適切な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は二度以上使えません。)

ア、しかし イ、したがって ウ、むしろ
エ、たとえば オ、かえって

問三 { 線部ア } オから、異なる意味・用法のものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 —— 線部 1「単純な生命力」とありますが、これは何を意味しますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、体を構成する無数の細胞の力 イ、どんな社会でも生きていく力
ウ、上達の筋道を自分で見出す力 エ、肉体としての生を維持する力
オ、大人が子どもに伝えるべき力

問五 —— 線部 2「上達の論理」とは、具体的にどんなことですか。この後に述べられているイラン人のピリさんの話を参考にして、三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六 —— 線部 3「学ぶ」とはどういう意味で使われていますか。—— 線部 4「教えられる」との違いを参考にして、三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線部 5「当人」とは誰のことですか。文章中の言葉で答えなさい。

問八 ——線部6「暗黙のうちに行われている事柄を認識し、表面化させる」の説明として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、無意識に行われている優れたものに気づき、注目する。
- イ、秘密にされてきた優れた工夫を認め、広く世の中に知らしめる。
- ウ、誰もが当たり前だと思ふことに疑問を抱き、それを表明する。
- エ、全体的には劣る者でも、技を盗もうと認識すれば結果が表れる。
- オ、言葉に表されずに行われている物事を、明確に表現する。

問九 本文を読んで、「できる人」はどこがちがうのかを、七十字以内でわかりやすくまとめなさい。

— 5 —

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校五年生の一子は、温泉のわく湯里町に住み、家は「はたる館」という老舗旅館を営んでいる。女将である祖母、板前の父、旅館で働く母、その他には、何人かの仲居さんをやとっている。

ある日、若い女性がひとりで「はたる館」に泊まりにきた。旅館の人々は、その女性がかかいつめた気持ちでやってきたのではないかと心配し、特別なもてなしをしてなんとか無事に過ごしてもらいたいと思っている。

次の場面は、ひとりで散歩に出かけたその女性の身に何かがあつては大変だ、とばかりにみんなが困っているところである。

「うち、行こか？」

おばあちゃんとお母ちゃんが同時に振り向いた。

「うち、お客さんの後から、ついてくわ。なんかあつたら大声出して人を呼べええのやろ」

おばあちゃんの目が一子を見つめる。

「一子、どんなことがあつてもお客さまにご迷惑かけんだけの気、配らなあかんのやで」

「わかつてる。うちかて、生まれた時から旅館の子やつてるのや、ちゃんとできるやつてみるわ」

おばあちゃんの手が、一子の髪をゆつくりとなでた。

「そうか、そうやな。あんたの言うとおりや。一子は、親より、よっぽどできがええ」

お母ちゃんの顔が、きつくなる。

「お義母さん。そんなたいそうなこと、一子には A が重すぎますえ」

「だいじょうぶや」

おばあちゃんは、身体をぐっと伸ばした。

「大人がぞろぞろついていくわけにはいかんけど、子どもならどうにでも申し開きができる。一子に任せまひよ」

身体の内奥で、ちっと火が燃えた。心がぶるんと震える。身体も震える。武者震いというやつだろうか、任せられたのだという気負いに震える。そして、力がわいてくる。

「たのんだえ、一子。これな、おばあちゃんのカンやけど、『蜚』のお客さま、だいじようぶやと思う」

「うん、お父ちゃんもそう言うてた」

「そうか、けど、氣いしめてな」

「うん、行ってくる」

運動ぐつを引つけて、一子は、勝手口から外へ飛び出した。

「一子、ええか、大声を出すんやで。それだけやで、いらんことしたらあかんえー」
後ろから、お母ちゃんの声が追いかけてきた。

土曜日の温泉通りは、賑やかだ。旅館の浴衣を着た人々が、数人ずつ固まりになって、しゃべり、歌い、歩く。土産物屋を覗き込み、高すぎると文句を言い、大口を開けて笑う。

その中を『蜚』のお客さんは、トレーナーとGパンのかっこうで、ゆっくり歩いている。鶏の群れの中に、たった一羽紛れ込んでしまった小さなカナリアのようだ。頼りなく、周りから浮き上がって見える。

お客さんは、土産物を選ぶでもなく、辺りを眺めるでもなく、ただまっすぐ、川の方へ歩いていく。一子は、胸がどきどきしてきた。

吾妻橋。昼間、一子が雪美と別れた辺りまで来ると、『蜚』のお客さんは、B

足を止め、コンクリートの欄干に凭れるようにして下を覗き込んだ。
通りの明るさも、賑いも、ここまでは届かない。川の音と、時おり雲にかくれる月明かりがあるだけだった。一子は、後ろを振り向いた。声の大きさには、自信がある。

よし、だいじようぶや。ここで叫んだら、充分聞こえる。そう思った時、『蜚』のお客さんが、急に顔をあげた。泣きぼくろのある目が、一子を見つけた。

「あら、あなた、たしか旅館の……」

「えっ？ あつども、こんばんはあ」

「わたしに、何か用事？」

「どんなことがあってもお客様にご迷惑かけんだけの気、配らなあかんのやで」
おばあちゃんの声が、頭の中で響く。「一子は、身体がぎゅっと縮まるような気がした。」

「いえ……あの、えーと、あつ、あの、はたる」

「ほたる？」

「うん、うち、ほたる採りにきたん」

「ほたる、ほたるが、いるの？」

ほたるには、まだ早い。よく、わかっている。

お客さんは、近寄ってくると、

「わたし、見たいわ。テレビでしか見たことないの。連れてってくれる？」

と、言った。長い髪が、川風に揺れる。

「うっ、うん……でも、飛んでないかもしれへん」

「いいの、連れてって、えーと……」

「一子、一、二の二」

「一子ちゃん。わたし、素子。よろしくね」

困ったなあ一子は、思った。ともかくここだけは、つけなければならぬ。川の上流に向かって歩き出す。吾妻川が山裾に沿って大きく曲がっている辺り。そこは、夏には川柳が、秋にはススキが生い茂る川原になっていた。一子たちの、ほたるがりの場所にもなっている。

「ほたる館の料理ってすごいね。とても、おいしかったわ。それに、きれい」

「うん、特別室のは、特に念いれて、作るから……」

「ああそうね。わたしが、ちょうど五万人目のお客なんですってね」

五万人やて、お母ちゃん、えろう張り込んだな。一子は、下を向いて小さく笑った。

「うれしかったな。わたし、そんな幸運に当たったことなんか一度もなかったの。あんまり、運が良い方じゃないのね……」

素子の言葉が跡切れる。視線がC揺れた。一子は、白いトレーナーの腕にしがみついた。細い。

「手え繋いでいこ」

「えっ、ええ、いいわよ。でも、一子ちゃん、一人ではたるを採りにいくつもりだったの？」

「へっ？」

「それに、つかまえる道具なんかいらないの？」

そんな細かいところまで、筋書き考えてへんわ……そう思った時、家の明かりが見えた。山裾にしがみつきたいに建っている小さな家、雪美の家だ。

そや、雪ちゃんや。神様、仏様、おきつねさま。おおきに。

「うち、友だちと約束してたんよ。ここの家の子。待っててな」

一子は、雪美の家の玄関に飛び込んだ。

「こんばんは、雪ちゃん、雪ちゃん」

「あれっ、いっちゃん。どないしたん？」

「雪ちゃん、ほたる採りにいこう」

「ほたる？ まだ早いとちがう？」

「ええの、お客さんが見たいって言わはるの。なあ、ついてきて。拝むわ。それから、ほたるぼうき持つてるやろ。あれもお願い。なっ」

雪美は、ばちばちと瞬きして、ええよと頷いた。

三人で歩き出す。かれたナタネの茎で作ったほたるぼうきを雪美は、肩にかついでいる。

雪ちゃんのおかげでかつこうは、ついたけど……ほたる、ほたる、一子は、心の中で念じた。お願いします。ちよこつとだけでも飛んで下さい。お願いします。

風がふいた。川辺の柳の葉が揺れる。ふいつと微かな光が闇に浮いた。

「あっ」

一子と雪美は同時に叫び、走り出した。

「あつ、待つて、一子ちゃん」

素子が、後を追う。

山裾と川の間は、車一台がやっと通れるほどの道になっている。そこを走る。そのままの勢いで、川原におりる小道を二人は駆け下りた。

「いてる！ ほたるや、いっちゃん」

「うん、ほたるや」

ほたるがいた。たくさんではない。それでも、川面の上で、草の中で、柳の葉先で、初夏の闇の中で、淡い小さな光は確かに輝いていた。

「まあ……ほんと。これが、ほたるなのね」

一子の後ろで、素子が呟く。

「ほらっ、とれた」

雪美が、大きな声をあげた。ほたるぼうきの先に、引っかかるようにして三つの光が瞬いていた。

「わあ、見せて」

素子が手を差し出す。一子はほうきの中から、黒い小さなおしりの光る虫を取り出すと、素子の手にとつと載せた。

「まあ、きれい。こんなに、明るいなんて……」

三つの命ある光は、闇の中に、素子の白い手のひらを微かに浮かび上がらせる。指の長い細い手は、ほたるの光に内から輝いて、月夜に咲いた白い花のように見えた。

(きれいや。ほたるって、こんなにきれいやったんやな)

夏が始まる度に見てきたはずの光なのに、今夜はなぜか、特別の輝きのように感じてしまう。一子たちのために神さまが贈ってくれた小さな輝きだ。身体に染み渡ってくるくらいきれいだと思う。

一子は顔をあげて、素子に笑いかけようとした。

「うっ……」

素子の頭が傾いた。ほくろを伝って涙が落ちる。一子は驚いて、一歩あとずさりした。

「いっちゃん……」

後ろで、雪美が何か囁いた。

「ごめんなさい……わたし、知らなくて……こんな、きれいなものがあるなんて……わたし、知らなくて、ごめんね……なんで、涙が……」

素子は、静かに泣いている。その顔は仄かなほたるの光の中で、昼間よりずっときれいに見えた。口元がほんの少し笑っているようにも見えた。泣いているのに生き生きとして艶がある。(素子さん、きれいやな) そう思い、思いながらほっとしていた。

「ほたる、逃がしてやらなくちゃあね」

ふいに、はっきりした口調でそう言うと、素子はトレーナーの腕をまっすぐに前に伸ばした。

ほたるが飛びたつ。

一つ、二つ、三つ。闇の空に向かうように、ゆつくりと飛んでいく。その先に、丸いばやけた夏の月があった。

かぐや姫が月に帰る時って、あんなふうに泣いたんやろか。ほたるの光を上へ上へと目で追いながら、一子はふっとそんなことを考えた。

次の日、玄関先で素子は、深々と頭を下げた。

「お世話になりました。おかげで、とてもすてきな一夜をすごせてもらいました」

「まあまあ、お客さまにそないに言うてもろうて、もったいないことです。こちらこそ、ありがとうございました」

おばあちゃんも、頭が地面につくほど身体を曲げて、おじぎをした。

「ありがとうございました」

お母ちゃんも、仲居さんたちもいっせいに頭を下げる。大人たちの後ろに立っていた一子と素子の目が合った。素子の口元が、少し動いた。ほんのちよつとの間、一子を見つめ、ゆっくり頷くと素子は、広さんのマイクロバスに乗り込んでいった。

【あさのあつこ「土曜日のほたる」(『ほたる館物語』所収)より】

*うち……私

問一 [A] に適切な漢字一字を当てはめ、その部分が「能力の割には仕事の責任や負担が大きい」という意味をもつ慣用句になるようにしなさい。

問二 [B]、[C] にあてはまる最も適切な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は二度以上使えません。)

ア、かつと イ、ふつと ウ、はつと

エ、ぶつと オ、さらつと

問三 —— 線部1「申し開き」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、いつわり イ、そうだん ウ、あいさつ
エ、かわり オ、いいわけ

問四 —— 線部2「一子は、身体がぎゅつと縮まるような気がした」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、これからお客さまの身に起こることに不安をおぼえたため。
イ、失敗しておばあちゃんにしかれることを想像したため。
ウ、緊張感をもって行動しなければならぬと再確認したため。
エ、見知らぬお客さまと仲良くならなければいけなかったため。
オ、相手からの意外な言葉にどうしていいかわからなかったため。

問五 —— 線部3「困ったなあ」と一子は、思った」とありますが、その理由を四十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六 —— 線部4「神様、仏様、おきつねさま。おおきに」とありますが、なぜこのような言葉が出てきたのですか。その理由を三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線部5「きれいや。ほたるって、こんなにきれいやったんやな」とありますが、そのように感じた理由を四十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 —— 線部6「素子の口元が、少し動いた。ほんのちよつとの間、一子を見つめ、ゆっくり頷く」とありますが、旅館での滞在を通して、素子は何を思い、また一子にどのようなことを言いたかったのですか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。